

2023年9月3日

ベトナム出張レポート

肥料部 半田

出張先：ホーチミンシティ

期 間：2023年8月22日～27日

訪問先：ショクレンベトナム社、農家、高島屋・イオン食品売り場

同行者：(株)ショクレン北海道 嶋田社長

(株)丹波屋 幸田会長、中川副支店長、信行次長

目 的：ベトナムの米の流通事情調査他

《ベトナム農業の概要》

農作物はメコン（南部、カントー周辺）と紅河（北部、ハノイ周辺）の二つの肥沃なデルタで生産される米が中心で、重要な輸出品である。このほか、さとうきび、キャッサバなどの生産も盛んで、コーヒーはブラジルに次ぐ世界第2位の生産国である。ゴム、カシューナッツ、コショウ、茶、果物類の生産も多く、世界トップクラスの輸出量である。

米の生産については、北部の紅河デルタでは自家消費が大半であり、商業用として流通する量は非常に少ない。一方、メコンデルタはベトナム最大の米生産地域であり、商業的なコメの生産が行われている。ベトナムの米の作付け700万haの内、半分以上がメコンデルタで作付けされている。



《ショクレンベトナム社訪問（平岡常務、三ツ橋氏面談）》

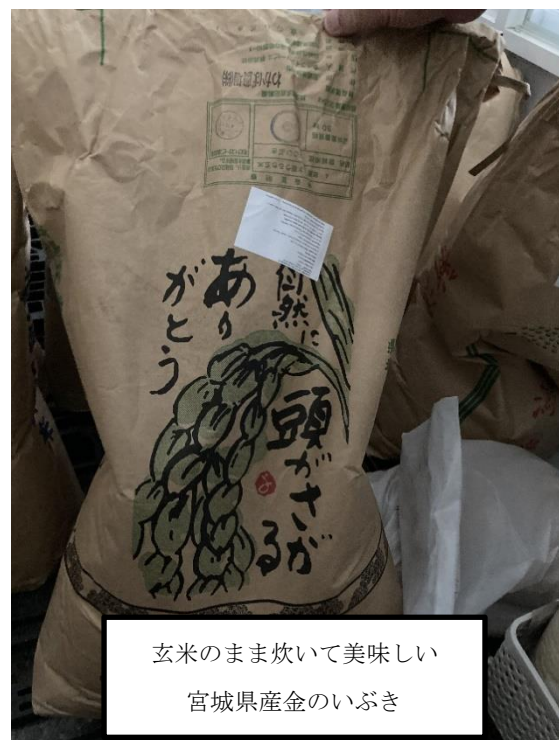
(株)ショクレン北海道のベトナム現地法人。5年前に設立、社員は5名。北海道産をメインに、日本産の玄米を冷蔵コンテナで輸入し、注文を受けてから、精米し販売している。品質を保つため輸送から保管まで20度前後となるよう温度管理を徹底している。「三代目俵屋玄兵衛」のブランドで「日本で食べるお米よりおいしいお米を海外で」をモットーにつきたてのお米を提供している。販売先は日本料理店、高級スーパー、富裕層の個人。価格は現地の長粒種より4～5倍の価格で販売。品質にこだわっているため決して価格を下げることはしないとのこと。



ベトナムは世界3位の米の輸出国であり、米の輸入には消極的であった。日本の農水省もベトナムへの輸出禁制品扱いであったが、(株)ショクレン北海道が輸出を開始したことで

禁制品ではなくなったとのこと。ベトナムも TPP 参加国のため関税はかからないとのこと。
近年はベトナムも生産の技術力が向上し、品質が上がってきている。

なお、(株)ショクレン北海道はベトナムを含め、アジア圏を中心として 7~8 か国に年間
800t 輸出しているとのこと。



《高島屋米売り場視察》

三代目俵屋玄兵衛が 2kg で約 2,000 円で販売されている。ベトナムの一般的な長粒種は 2kg で 300 円～700 円。(1,000VND=約 6 円)



《農家訪問》

ホーチミン郊外の TAN 農場を訪問。2,700 m²の敷地に、ホウレンソウ、レタス、空心菜、アマランサスなどを栽培している農家。生産物は近くの市場に持ち込む。水は地下水をくみ上げ、スプリンクラーで散布。ホウレンソウは年間 12 作するが、鶏糞をメインに施用しており、連作障害はほとんど出ないとのこと。農薬はほとんど使用せず、虫が大量発生した場合のみ殺虫剤を散布する。購入している BB 肥料は 50kg で 6,000 円程度とのこと。





《イオン米売り場視察》

ベトナム産米 600 円～1,500 円/5kg 。ジャポニカ種も並んでいるが、ベトナム産。柔らかさや香りなど品質評価が記載されている。「ST25」は国際米コンクールで最優秀賞を獲得した長粒種の品種。



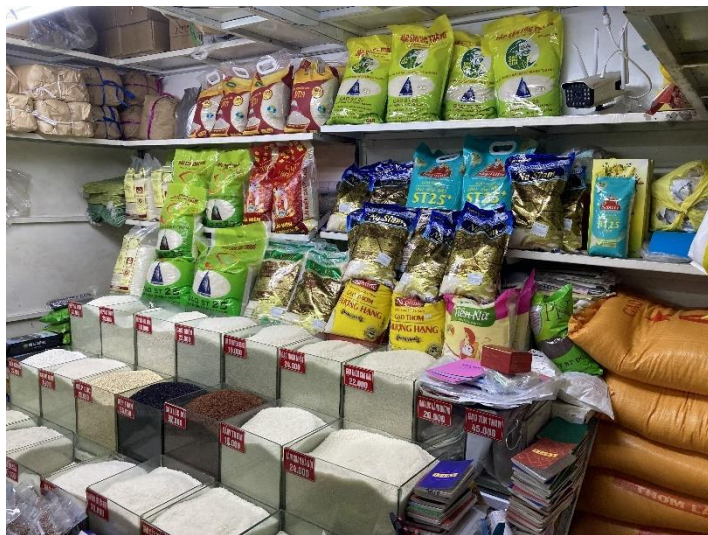


今回の視察を通して、ベトナムでの日本産米の流通、ベトナム産の長粒種、ジャポニカ種の販売状況を知ることが出来ました。現地の日本料理店ではジャポニカ種を提供しているところが多いですが、ベトナム産の米であり、日本産はまだ浸透していません。人口が約1億人で、平均年齢が31歳と若く、これから経済発展するベトナムにおいては、差別化した日本産米の需要は今後も見込まれ、販売量は増えるのではないかと思います。ベトナムのみならず東南アジアは発展途上の国が多く、当社としても何か海外展開できる農産物があるかもしれません。農水省は、2030年までに農林水産物、食品の輸出を5兆円とする目標を立てています。輸出を手掛けている業者と当社の肥料部、農産事業部が手を組んで、本格的に輸出事業を検討することが必要ではないかと思います。

最後になりますが、今回は大変貴重な経験となり、ご同行いただいた㈱ショクレン北海道
嶋田社長、他関係者の方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



日本料理店へ配達中の
ジャポニカ種



市民市場内のお米屋さん